

夏目漱石『門』の御米について

藤 井 淑 禎

『漱石作品論集成【第七卷】門』（赤井恵子・浅野洋編、一九九一）に解説鼎談の司会者として関わって以来、この作品はボクにとって、時として妙に気になる作品、という不思議な存在であり続けてきた。そのわけを考えてみると、何よりも、（よく言われることだが）宗助・御米・安井の三者をめぐる「徳義上の罪」事件の全貌が読者に示されるのが、全二十三章中の十四章の十（ページ数でいうと、岩波の九四年版全集で全二六三ページ中の一八七ページ目）においてであるという、特異な筋の運びが、最たる理由であるように思う。

こうした真相の後出しをめぐっては、正宗白鳥の、「作者のからくり」に「激しい嫌悪を覚えた」という否定的な感

想（『夏目漱石論』『中央公論』一九二八）に対して、過去を伏せておいてあとで「前歴を明かす結構こそ、『門』の生命」とする杜本武説（『門』『国文研究』一九七八）、「伏線が丹念に描かれ」「結末に向かって整然と展開し、冒頭と結末とが絶妙に照応している作品」とする酒井英行説（『門』の構造『日本文学』一九八〇）など、当然のことながら議論が集中している。もっとも、杜本説は単純な肯定論ではなく、結果としての現在の生活を招いた「徳義上の罪」事件の、原因の「追求描写」が迫力不足であると批判もしているが。

これらに対してボクがこの「特異な筋の運び」が、ひいては『門』という作品が気になるというのは、ちよつと

違った理由からだ。近年のボクの研究課題の一つに（『作品論の再建』というものがあるが、そこで重視すべき二つの柱として、読み進み解釈と同時代読者による解釈とを掲げており、前者のもっともふさわしい例として『門』を考えているからなのである。

ここ二、三〇年で、作品とは読者がつくるもの（＝読書行為によって現前してくるもの）との常識こそ広く共有されるようになったものの、読書行為によって読者が作品をつくる、といった時、厳密に言えば、その、読書と作るとの関係が、読者が読み進むにつれて作品が徐々に形をなしていき、読み終えた時点で最終的に作品が完成する、と考へなくてはならないことまでは、十分には共有されなかつたように思う。

この読み進み解釈の反対が、読み終えた地点から振り返って作品を概観する振り返り解釈で、たいていの作品論はこのタイプに属する。要するに作品を完成品として静的に捉えようとする立場だ。これに対して読み進み解釈は、作品を徐々に出来上がりつつあるもの、動的なものとして捉え、説明（解説、分析）する。この分類法に従うと、「前歴を明かす結構こそ、『門』の生命」であると指摘した、これまで『門』論中の白眉ともいべき社本論すら、振り

返り解釈のグループに入りかねない。

その点、正宗白鳥の論は、みずからの読み進み解釈の過程を正確に説明（解説、分析）している。少し長くなるが、紹介してみよう。

はじめから、腰弁夫婦の平凡な人生を、平坦な筆致で淳々と叙して行くところに、私は親しみをもつて随いて行かれた、この創作態度や人間を見る目に於て、私は漱石の進境を認めた。——さう思つて読んでゐた。ところが、しまひの方へ近づくと、この腰弁夫婦は異常な過去を有つてゐることが暴露された。私は、旧劇で、鱧七が引抜いて金輪五郎になつたのを見るやうだつた。安官吏宗助実は何某と變つて、急に深刻性を發揮するのに驚かされた。友人の妻を奪つた彼は、「それから」の代助の生れ變りのやうな気がした。さう云へば、はじめから、何かの伏線らしい変な文句がをりをり挿まれてゐたのだが、他の小説とはちがつて、『門』にはしみじみとした、銜気のない世相の描写が続いてゐたので、私は、それだけに満足して、貧しい牙えない腰弁生活の心境に同感して、変な伏線なんかをあまり気にしなかつたのであつた。それほど従順な読

者であつたために、後で作者のからくりが分かると、激しい嫌悪を覚えた。宗助が正体を現はしてからの心理も一通り書いてあるには違ひないが、真に迫つたところはなかつた。鎌倉の禅寺へ行くなんか少しふざけてゐる。(後略)

実況中継的に、読み進むにつれて感じたことや考えたことが率直に述べられている。読み進み解釈において重要なものが、この、読み進んで行く過程での読者の反応(驚きや落胆や感想)なのであり、それらを説明に取り込んでこそ、作品は(徐々に出来上がりつつある)動的なものとして捉えられ、われわれの前にその全貌を現す。そしてこの読み進み行為のゴールで明らかとなるのが、「前歴を明かす結構こそ、『門』の生命」(社本論)とか「冒頭と結末とが絶妙に照応している作品」(酒井論)といった概観的まとめなのであり、最初からここに行けるわけではないし、これだけでいいわけでもない。概観的まとめと読み進んで行く過程での読者の反応の記述とは一体となつて、あるべき作品論を構成するのである。

「妙に気になる作品」としての『門』、というところから、「特異な筋の運び」について、さらには読み進み解釈が振り

返り解釈か、という大問題へと話を進めてきたわけだが、「特異な筋の運び」に次いでボクが『門』で気になっていることというのが、本稿のタイトルともなっている御米の描かれ方、というか、御米をめぐるもろもろのことなのである。

*

「特異な筋の運び」に次ぐ『門』の大きな特徴としては、御米に関する情報が極端に少ない点が挙げられる。かすかな情報としては、東京が生まれ故郷とあるが(十一の一)、安井によれば「横浜に長く」(十四の七)いたことにもなっている。安井と京都に来る以前の御米に関する情報はこの程度であり、何よりも不自然なのは、恋愛事件の以前も以後も御米のまわりに親兄弟の影がまったく見られないということだろう。東京で出産(ただし死産)した折にも(十三の六)、急病のあと薬のせいで長く目覚めなかつた折にも(十一の一〜十二の二)、縁者が見舞いに来た気配はない。結婚とか引越しの折も同様である。

もつとも、この点に関しても、前掲の社本論は注意を促しており、「お米の描写が不足」であるとか、「前歴描写が一切なく」「前半生は全く不明」なのは「不可解」である

とか、宗助と御米が親親類を捨てた後（十四の十）、「お米の親や親類は、その後の六・七年間どうなったのでしよう」などと疑問を投げかけている。同様に御米の過去を問題視しているのが玉井敬之の論（『門』——過去と現在のドラマ）『国文学』一九九二・五など。『漱石 一九一〇年代』所収、二〇一四）で、御米の罪は、安井への裏切り以外にも、安井と出会う以前に何かあったのではないかと想像しつつも、それは書かれることはなかったとしている。これらの論に対して、ボクに特段の異論があるわけではない。それより、ボクが気になるのは、この点をめぐる作者側の理由と、読者側の反応のほうなのである。

もちろん、それらはしよせん推測の域を出ないかもしれない。作品論が感想や推測を禁じ手とするようになってからいぶん経つが、だからといって、こんなに大きな特徴について、当然あるはずの「作者側の理由と、読者側の反応」を不問に付していいわけがない。慎重な物言いで、かつ推測であるとの留保つきで、何らかの推理をしたり想像をめぐらしてみたりする必要があるのではないだろうか。

作者側の理由としてまず考えられるのは、話が枝葉に広がることでテーマ展開の凝縮と集中が妨げられるのを危惧したから、だろうか。社本論のようにそれらの欠如を不可

解とする正反対の考え方もあるが、必要不可欠とはいえない方向への脱線を恐れたため、という理由は確かにありえなくはない。これは言わば、意図的に省いたという解釈だが、不可抗力で、つまり省かざるをえなかった、書けなかった、という可能性も考えなくてはならない。もともと、こうなると、理由はさまざまに考えられ、だんだん放恣な想像へと陥ってしまいうので、ここではひとまず「書けなかった可能性」の指摘までとどめておく。

これに対して、読者のほうは、こうした御米の描かれ方（正確に言えば〈描かれなさ〉か）に対して、どのような思いを抱いただろうか。前述した情報不足や不自然さに違和感を抱いたであろうことは、当然考えられる。しかし、情報不足である半面、特に恋愛事件前後の部分には、御米に關して書きこまれた情報も少なくない。それらを整理し、総合して、そこに推理を加えることによって、読者が御米という女性をどのような女性として見ていたかについて、ある程度確度の高い想像をすることは可能なのではないだろうか。以下、本稿では、作品分析の正道からの逸脱は覚悟のうえで、『門』論に必要不可欠な手続きとして、読者の抱く御米像について「想像」をめぐらしていこうと思う。

*

恋愛事件前後の部分の御米に関する情報中には、実は特徴的なものが少なからずあるのである。たとえば、安井から初めて紹介された折りの御米の態度は、次のように描写されている。

是から余所へ行くか、又は今外から帰つて来たと云ふ風な粧をして、次の間から出て来た。宗助にはそれが意外であつた。然し大した綺羅を着飾つた訳でもないので、衣服の色も、帯の光も、夫程彼を驚かさ迄には至らなかつた。其上御米は若い女に有勝の嬌羞といふものを、初対面の宗助に向つて、あまり多く表はさなかつた。たゞ普通の人間を静にして言葉寡なに切り詰めた丈に見えた。人の前へ出ても、隣の室に忍んでゐる時と、あまり区別のない程落付いた女だといふ事を見出した宗助は、それから推して、御米のひっそりしてゐたのは、穴勝恥かしがつて、人の前へ出るのを避けるため許でもなかつたんだと思つた。(十四の七)

「若い女に有勝の嬌羞といふものを、初対面の宗助に向

つて」さえ、さほど見せない、「落付いた女」。そんな御米と、一年も経たないうちに、「二人は漸く接近し」、「冗談を云ふ程の親みが出来た」(十四の八)。そして、出会つて一年が経つた秋の頃の出来事として、もう一つ特徴的なことが、描かれている。

或時宗助が例の如く安井を尋ねたら、安井は留守で、御米ばかり淋しい秋の中に取り残された様に一人坐つてゐた。宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで、一つ火鉢の両側に手を翳しながら、思つたより長話をして歸つた。或時宗助がぼかんとして、下宿の机に倚りかゝつた儘、珍しく時間の使ひ方に困つてゐると、ふと御米が遣つて来た。其所迄買物に出たから、序に寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩くり寛ろいだ話をして歸つた。(十四の九)

一度は安井の部屋で、そしてもう一度は宗助の部屋で、宗助とお米は二人だけの時間を持つたというのである。この時代においてこうした振る舞いがタブーであつたことについて、ボクは『漱石全集 第八卷 行人』(一九九四・

七)の注解や、『漱石文学全注釈 12 心』(二〇〇〇・四)の注釈で、当時のマナー本だけでなく一般人の回想なども根拠として、論証している。

「若い女に有勝の嬌羞」も見せず、一室で若い男性と対座することを何とも思わないような御米という若い女。そしてその挙句は、安井を裏切つて宗助と駆け落ちまでするような女。安井と一緒にいる以前の情報量の少なさとは裏腹に、ここ(宗助と暮らし始める以前)での読者の目に映る御米像は、意外に鮮明な像を結んでいるのではないか。

ここで、「読者の目に映る御米像」にたぶんに関係する「妹」問題、すなわち安井が御米を宗助に紹介する際に「是は僕の妹だ」(十四の七)と言つたことの意味について、念のため確認しておこう。西垣勤は『漱石作品論集成【第七卷】門』に収録された『門』(一九六五)において、宗助は安井の「妹」と思っていた御米と「衝動的に結ばれてしまった」のであって、そうであればこれは「姦通」にはあたらず、そこに『それから』の代助との大きな違いがあると指摘している。この指摘を前掲解説鼎談で浅野洋は支持しており、この指摘が「どうしてその後踏まえられていかないのか」と疑問を投げかけている。しかし、結論を先に言えば、西垣の指摘は一種の勇み足に過ぎない。紹介の場

面の直後の「十四の八」で、宗助は、「妹だと云つて紹介された御米が、果して本当の妹であらうかと考へ始めた」とあるからである(この点については玉井論を始めとして従来も指摘がある)。宗助がそんなふうにも当然で、当時は異性の相手を兄妹や従兄妹と偽つて紹介する(特に最初とか、疎遠な相手に対して)のはよくあることであつたからである。床の中でそのことについて思いめぐらし始めた宗助だが、「此疑の解決は容易でなかつたけれども、臆断はすぐ付いた」と記されている。このあとと数行ばかり臆断についての記述があり、解釈は一義的にはむずかしいかもしれないが、臆断の内容が、妹であるはずはあるまい、であつたことはほぼ動かないのではないか。この部分に関して、『漱石全集 第六卷 それから・門』(一九九四・五)にも『漱石文学全注釈 9 門』(二〇〇一・三)にも的確な解釈が見られないのはどうしたことだろうか。こうした個所こそが注解や注釈の腕の見せ所であろうはずなのに。妹問題は直接的には宗助側の問題だが、それでも、読者が御米をどう見ていたかとも密接にかかわるので、あえて確認しておく。

繰り返せば、「若い女に有勝の嬌羞」も見せず、一室で若い男性と対座することを何とも思わず、その挙句は、安

井を裏切つて宗助と駆け落ちまでするような女。それが読者の目に映つた御米像（宗助と暮らし始める以前の）だったのである。この点についてのさらなる追究は後回しにして、今度はそうした御米と安井はどのようなようにして知り合ひ、京都で暮らすに至つたのかについて考えてみることにしよう。もちろん、この点に関しても、作中での記述はさほど多くはない。当初断つておいた通り、慎重な物言いを心掛け、推測であれば推測であるとしたうえで、可能な範囲で、何らかの想像をめぐらしてみようというのである。

宗助は「ある事情のために、一年の時京都へ転学」（四の三）して、そこで安井と知り合つた。その安井について、「十四の二」では、「よく何処かに故障の起る」、すなわち体が虚弱であり、「国は越前だが、長く横浜に居たので、言葉や様子は毫も東京ものと異なる点がなかつた」と紹介されている。そして問題の夏休みとなるわけだが、その前後の二人のやりとりを以下に抜き出してみよう。

学年の終りに宗助と安井とは再会を約して手を分つた。安井は一先郷里の福井へ帰つて、夫から横浜へ行く積りだから、もし其時には手紙を出して通知をしやう、さうして成るべくなら一所の汽車で京都へ下ら

う、もし時間が許すなら、興津あたりで泊つて、清見寺や三保の松原や、久能山でも見ながら緩くり遊んで行かうと云つた。宗助は大いに可からうと答へて、腹のなかでは既に安井の端書を手にする時の心持さへ予想した。（十四の三）

これが夏休み前の状態だが、「立秋」となり「二百十日」となり「京都へ向ふ支度をしなければならなくなつ」（十四の四）でも、安井からの連絡はなかつた。

彼は此間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。家へ帰つた当座は、まだ二ヶ月も先の事だからと緩く構へてゐたが、段々時日が逼るに従つて、安井の消息が気になつてきた。安井は其後一枚の端書さへ寄せなかつたのである。宗助は安井の郷里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事は遂に來なかつた。宗助は横浜の方へ問ひ合はせて見やうと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、何うする事も出来なかつた。（同前）

安井と横浜との関係もしよせん憶測の域を出ないが、福

井が安井家の出身地で（もと福井藩士？）、父なり祖父なりが横浜に出て商売を始めたか、あるいは役人として横浜在住で、そこで安井も育った、というところあたりが、比較的容易に想像できることではないだろうか。さて、そんな宗助のもとに、ようやく待ち焦がれていた安井からの手紙が届いた。

愈立つと云ふ間に、宗助は安井から一通の手紙を受取った。開いて見ると、約束通り一緒に帰る積であったが、少し事情があつて先へ立たなければならぬ事になつたからと云ふ断を述べた末に、何れ京都で緩くり会はうと書いてあつた。（十四の五）

仕方なく宗助は一人で興津や三保を回り、安井に絵葉書を送つたりしたもの、結局退屈を持て余して、早々に京都へと帰ってくる。九月上旬のことである。ところが「不審な事には、自分より三四日前に帰つてゐるべき筈の安井の顔さへ何処にも見えなかつた」（同前）。そこで郊外の安井の下宿を訪ねてみると、意外にも、安井は「郷里へ帰つてから当日に至る迄、一片の音信さへ下宿へは出さなかつた」ことをそこで教えられる。

それからの一週間ほどは、大学に行くたびに気にかけてみたものの、会うことはできなかつた。次第に宗助は「早く安井に会ひたいと思ふよりも、少し事情があるから、失敬して先へ立つとわざわざ通知しながら、何時まで待つても影も見せない彼の安否を、関係者として寧ろ気に掛けるようになる。学友にも尋ね回つたところ、一人だけ、「昨夕四条の人込の中で、安井によく似た浴衣がけの男を見た」という者がいた。宗助にはとても信じられない話だったが、その「話を聞いた翌日、即ち宗助が京都へ着いてから一週間の後、話の通りの服装をした安井が、突然宗助の所へ尋ねて来た」（同前）のだった。

「着流しの儘麦藁帽を手持つた」（十四の六）安井の顔には、「夏休み前の彼の顔の上に、新しい何物かゝ更に付け加へられた様な気がした」。安井の上に、何らかの変化を宗助は見取つたのである。そのうえ彼は「何故宗助より先へ横浜を立つたかを語らなかつた」。又途中何処で暇取つた為、宗助より後れて京都へ着いたかを判然告げなかつた。然し彼は三四日前漸く京都へ着いた事丈を明かにした。さうして、夏休み前にゐた下宿へはまだ帰らずにゐると云つた。しかもいまは三条辺の三流の宿屋に居ると言い、近々小さい家でも借りるつもりだとも言う。そうして

この「思ひがけない計画」は「宗助を驚かした」。家を借りるのは結婚とか就職を待つてするのが当時の常識だから、当然の反応と言えよう。それから一週間ばかりうちに、安井は言葉通り、「学校近くの閑静な所に一戸を構へた」。宗助は九月末に初めてここを訪れた際に「粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認め」、そして一週間ばかり経った二度目の訪問時に、前述のように「是は僕の妹だ」と御米を紹介されたというわけである（十四の七）。

このあとの展開は周知のように、徐々に交わりを深めていくなかでの一年後の三人での秋の茸狩り、インフルエンザを患って御米とともに転地していた安井の滞在先を訪問、そしてその後の、京都に帰って春の初めから終わりにかけて宗助と御米を吹き倒した「大風」の記述へと続いていく。この、大風に吹き倒されたあたりの経緯があいまいであるとの批判は『門』論の常套となつてはいるが、本稿の関心は読者が御米をどう見ていたかのほうにあるので、それと密接にかかわってくる安井と結びつくまでの経緯について、書かれてあることを手がかりとして大胆に想像をめぐらしてみることしよう。

*

いったんは郷里に帰つたはずの安井はいつ横浜にやつてきたのだろうか。そして宗助よりも先に発つたとしたならば、京都の四条で目撃されるまでのあいだ（目撃の翌々日に、一週間前に京都に着いた宗助と再会し、その三、四日前に京都によく着いたと言っている）、安井はどこにいたのだろうか。愚を承知で計算してみると、安井が「先へ立」つた数日（？）間、宗助が興津あたりをうろうろした後、京都に着くまでの数日間、そして宗助が京都着後の数日間の合計が、安井（と御米）がどこかを周遊していた期間と想像される。もう一つ言えば、「三四日前漸く京都へ着いた」と言う時の「漸く」にはどんな意味が込められていたのか。そしてその間、御米ともずっと一緒だったのかどうか。

書かれてあることの範囲を逸脱しないようにすれば、わかることはこの程度だが、ここに穏当な想像を加えて、安井の行動を推理してみることがそれほどむずかしくはない。安井が御米とどのようなか（旧知なのかどうか）、深い仲となつたのかは不明だが、友人との約束を反故にするほどの必然性のもとに、一週間から場合によつて

は十日以上をどこかで御米と過ごした後に、京都に戻って来たことはほぼまちがいない。そして、その後の御米の身の振り方を見る限り、多くの論が指摘するごとくこれが一種の駆け落ちのようなものであったことも。

ここで考え合わされなくてはならないのは、御米に関する前述の二つの特徴である。一つは、御米のまわりに親兄弟の影がまったく見られないということであり、もう一つは、「若い女に有勝の嬌羞」を見せないばかりでなく、一室で若い男性と対座するのも気にせず、果ては夫を裏切つてその友人と駆け落ちまでするようなタイプの女性として描かれていたということだ。前者は駆け落ちゆえと解されなくもないが、東京が生まれ故郷であり（十一の一）、すでに長い期間経っていることを考えれば、極端な疎遠ぶりとも言える。ここまで疎遠となるのはどのような場合なのだろうか。

さらに、もっと決定的なのは後者の特徴のほうで、ここから読者が想像するのは、御米が素人の女性ではなかった可能性ではないだろうか。そう考えれば、親兄弟との極端な疎遠ぶりも納得がいくのである。安井によれば御米は「横浜に長く」（十四の七）いたことになっている。旧知なのか、この夏に出会ったのかまではわからないが、安井は

横浜で玄人の女性である御米と恋に落ち、駆け落ちに及んだのではないだろうか。一週間から場合によっては十日以上の周遊は、二人にとって逃避行でもあれば、一種のハネムーンでもあったにちがいない。

もちろん、遊郭の娼妓であれば足抜けなどは容易でないだろうが、銘酒屋のたぐいに勤める女性と考えれば、駆け落ちもむずかしくはない（だろう）。横浜という場所にこだわれれば、有名な「チャブ屋」なる一種の銘酒屋の町もある（考証は別の機会に譲る）。——以上は頑なな漱石信奉者の目には一見たわ言のように映るかもしれないが、前述の二つの特徴と安井・御米の不可解な結びつきとに基づいて、読者の目に御米はどのような女性として映っていたかについて推理を推し進めていくと必然的にこのような結論となる、ということを書き添えておく。

ここで問題を『門』全体に広げて考えてみると、むしろこうした御米像は、東京で宗助と隠れ棲み始めてからの、われわれに親しい御米像とは相容れない。水と油と言ってもいいほどの懸隔ぶりなのであり、その意味では『門』は明らかに失敗作なのである。姦通・駆け落ちという面白そうな趣向こそ思いついたものの、作品前半の東京時代のよ

うな御米に、(横浜)京都時代のような振る舞いができるわけがない。ここで話は冒頭で取り上げた「特異な筋の運び」問題に帰ってくる。さらには、それは意図的だったのか、不可抗力だったのか、という問題にも。意図的と考えれば、作者は一種のミステリー・タッチを狙ったことになる。白鳥流に言い直せば、激しい嫌悪を覚えるほどの作者のからくり、ということだ。ボクも以前はそう考えていた。しかし、徐々に、実は作者は肝腎の大事件を書こうにも書けずにズルズルと終わり近くにまで来てしまったのではないかと考えるようになった。しかし、終わりの方に持ってきたからといって、問題が解決するわけではない。御米像を分裂的に描かない限り、あの大事件は書けないのだから。そして分裂を最小限にしようとした結果として、御米に関する情報不足がもたらされたと考えられるかもしれない。

考えてみれば、漱石はこの種の失敗を繰り返している。『それから』でも結局姦通を描き切ることはできなかった。これは社本論の言うような検閲の問題などではなく、人物像をどう描くか、どう一貫させるか、の問題なのである。姦通を犯すような人物として一貫させるか、さもなければ、姦通という趣向などはあきらめるかの二者択一なのだ。繰

り返しになるが、作品前半の東京時代のような御米に、(横浜)京都時代のような振る舞いができるわけがない。『それから』、『門』の失敗を受けて、この難問は、『行人』、『心』、『明暗』といったその後の作品にも引き継がれていくことになる。

(立教大学文学部教授)